わたしの「現代国語」教室（七）

――書き出す力　その二――

加藤宏文

はじめに

○短い文章の価値を知らせる。

むりなく書きおさめられたものが、短い文章であるとき、これは、意味と抑揚とのはっきりとしたもののはずである。(注1)

藤原与一先生は、作文の原理、作文教育の原理を説かれる。言語形式上の四つの本質的な要求を提出される。右は、うちの一項である。即して、先生は、さらに「ひといき作文」の提唱に、とりわけ力を込めておられる。

さて、わたしは、今「現代国語」を、一年、二年、三年と、持ち上がってきた。この三年にわたる学習計画(注2)の中では、先生に導かれて、その実践を、つぎの二つの場に求めてきた。

① わたしの「現代国語」「教室」

「理解」と「表現」との「ひといき作文」による「統合」

② 年間学習課題

「書きあらわす生活の日常化」(注1)と「ひといき作文」の自主的達成

右の計画のうち、②における「短い文章の価値」は、どのように達成されてきたか。さらに、その実態は、「書き出し」にどのように反映しているか。――本稿では、中で、女生徒Sさんの、第三学年第一学期末までの、四〇編の四〇〇字作文の展開に、それを見たい。

(1) 対象の教材は、どう「理解」されたか。

(2) 踏まえて、標題の要求にどう答えたか。

(3) それは、「書き出し」にどう反映したか。

とりわけ、「書き出し」の意義については、こう考える。すなわち、「書き出し」のとりわけ一文は、平面的には、「続き」や「終わり」と同次元で並列の関係をなす、一部分にすぎない。しかし、「抑揚」の「動態」からすれば、他をも見通し、いちはやくそれらを統合してもいる。

つまり、そこには、以下に展開される文章の総体を、いわば凝縮した価値が、すでに内在していると考えられる。と同時に、その価値は、「表現」の形の上に、はっきりと表れてもいる。本稿では、そこに注目していきたい。

一　書き出しの一文

まず、Sさんの「書き出し」の一文に注目し、つぎの三点で分析を加える。

① 文の長さ・短さ（〈表1〉中の数字が、その文字数を示す。）

② 標題要求の類型

A　Sさんの自由に任せる。

B　Sさん自身に引きつけるよう求める。

C　「理解」にあるべき中心語をおさえるよう求める。

D　敷衍し、社会性を持つよう求める。

③ 「書き出し」の一文の類型――標題要求に、どううけこたえているか。――

㋑ 引用　㋺ 実感　㋩ 体験　㋥ 自問　㋭ 解答

㋬ 事実　㋣ 実態　㋠ 敷衍

以上が、Sさんの四〇編にどのように表れているかを一覧すると、〈表1〉のようになる。（注○印は一年次、△印は二年次、□印は三年次の作品である。以下、各表における印も、右に同じである。）

〈表1〉○一年、△二年、□三年。

	㋑ 引用	㋺ 実感	㋩ 体験	㋥ 自問	㋭ 解答	㋬ 事実	㋣ 実態	㋠ 敷衍
A	○39 □48		○18 ○65 ○68 ○30	○5		○27		
B		○26 △28 □49 □33	○18 △28 □52 □25		○34 □57	△13		○21 △21
C	○51 ○37 △26 △18	○33 △47 △34 □24	□25 □43			△11 △57 □33	○35 △44 △22 △29	
D				△16				△50

さて、標題要求に即して、Sさんの「書き出し」の一文の類型は、年次とともにどう変わるか。三年次の作品絶対数が、他の年次のそれの半数である点に留意した上で、大観する。

A　Sさんの自由に任せると、一年次では、㋩の「体験」からの書き出し例が、多い。

B　Sさん自身に引きつけるよう求めると、㋩の「体験」からの書き出し例も、三つの年次にわたる。同様に、㋺の「実感」例も、年次を越えて広がりを見せてくる。

C　「理解」にあるべき中心語をおさえるよう求めると、A・Bの場合の例に加えて、㋑の「引用」・㋬の「事実」・㋣の「実態」の例も、現れてくる。

D　敷衍し、社会性を持つよう求めたのは、二回に過ぎない。三年

次の後半に向けて、この力が発揮されるよう、配慮を加えたい。では、右のように大観される「書き出し」の一文は、具体的には、どのようであるのか。

○「書き出し」の一文の類型例（抄）

㋑(1) 一つの感情を表現する時、それを表現することばは、まず一つだけということはない。（A○39・川崎洋「母の国・父の国のことば」を読んで。題自由。あなたのとらえたひとつのことば。）

(2) 「人生を生きる以上人生に深入りしない者は災いである。」（C△26・有島武郎「小さき者へ」を読んで。題自由。「書き出し」に一文を引用。）

(3) 夜中に台所に行ってみると、明日の味噌汁の具にでもなるのだろうシジミが、口をあけ、精一杯生きている。（A□48・石垣りん「シジミ」を読んで。題自由。ひとつの詩を対象に。）

㋺(1) タンスという言葉は、私に、妙に懐かしさを感じさせる。（B○26・羽仁進「自立と試行」を読んで。題「わたしにとっての『タンス』」）（注3）

(2) 酒呑童子の首塚の説話は、何となく神秘な気持ちを抱かせる。（B△28・馬場あき子「大江山の鬼」を読んで。題自由。）

(3) われわれは、最近本当に想像力を失なってきている。（C□24・なだいなだ「想像力について」を読んで。題「想像力について」）

㋩(1) 「弥次さん喜多さん」と言えば、たしか小学校三、四年生のころ、小学生用に書いてある本を一度よんだが、それっきりお目にかかっていない。（A○65・遠藤周作「私の『膝栗毛』」を読んで。題「弥次さんと喜多さん」）

(2) 私は、小さい頃作文やお話を作るのがとても好きだった。（B△28・加藤秀俊他「材料七分、腕三分」を読んで。題「わたしと文章」）

(3) 中学生の頃、啄木の詩が好きでよく読んだものだった。（C□25・石川啄木「はてしなき議論の後」を読んで。題「V NA RÔD!」）

㋥(1) 青春――。（A○5・生徒作品『青春』というもの」を読んで。題「わたしの意見」）

(2) 人間は、なぜ生きているのだろう。（D△16・堀辰雄「風立ちぬ」を読んで。題「愛の力」）

㋭(1) わたしのメモ法は、特にきまりなどはないけれど、だいたい次の通りです。（B○34・本多勝一「メモと原稿の間」を読んで。題「わたしのメモ法」）

(2) 読書をした後の気分によって、書き方もずい分違うが、私の感想文のタイプは第二と第三をまぜ合わせた感じのものだと思う。（B□57・「参考」「読書と感想」を読んで。題「わたしの感想文のタイプ」）

㋬(1) この間の新聞に「ICBMサイロ爆発」の記事がでていた。（A○27・「書く」「環境への意見を述べる」を読んで。題「ある新聞記事を読んで」）

(2) 歴史は、たえず変化している。（B△13・和歌森太郎・多田道太郎「歴史を巡る対話」を読んで。題「わたしたちと歴史」）

(3) 物事を理解する上において、ただまるまる暗記するほど無意

味なものはない。(C□33・高橋和巳「論語」を読んで。題「葛藤的思弁」)

㋩(1) 今日、写真はマスコミなどを通して、広く私達の生活にとけ込んできている。(C○35・名取洋之介「写真の読み方」を読んで。題「美術品としての写真・記号としての写真」)

(2) 近ごろの世の中で「おかげ」という言葉を本当に理解できている人は、大変少ないように思える。(C△44・青野季吉「憧憬」を読んで。題「おかげ」)

㋭(1) 人間の生涯は、長いようで、短いものである。(B△21・宮本常一「私の祖父」を読んで。題「市五郎の生涯に学ぶ」)

(2) 「レインコートを失くす」や「赤い繭から、私は、現代社会での人間の在り方について、考えるところがあった。(D△50・関根弘「レインコートを失くす」・安部公房「赤い繭」を学んで。題自由。)

これらの類型例からは、Sさんの個体史の一端が、こうも見てとれようか。

㋑ 引用型

(1)は、「理解」の対象とした教材にある表現そのままではあるが、「 」印がない。(2)は、その点、厳密さが加えられている。一方、(3)は、内容は踏襲しながら、自分の言葉である。

㋺ 実感型

(1)、(2)は、極似の文型である。Sさんの個性のひとつである。これを尊重して、どう伸ばすか。(3)の「本当に」に込められた万感の思いは、(1)、(2)を越えて、深化している。

㋩ 体験型

(1)は、「が」を接点にして、冗長な一文である。それに対して、(2)、(3)は、短く端的な「書き出し」の一文として、尊重するべきであろう。文の長・短の問題が、喚起される。

㋥ 自問型

(1)は、「——」に万感の思いが先取りされ、(2)は、読後感が、鋭い入り口を持たせている。

㋭ 解答型

いずれも、書き出しの一文としては、「ひといき」たりえていない。「特に」・「だいたい」、「ずい分」・「感じのもの」を整理したい。

㋬ 事実型

(1)は、標題に即した事実への開眼がある。この種の事実を持ち込む力は、大切である。(2)は、大きく深い理解に支えられ、(3)は、切実な日常的反省の上に立ち、それぞれ鋭い。

㋣ 実態型

(1)のように、事実がみつめられると、実態が、社会性をおびて浮き彫りにされる。(2)は、理解の中心語を、実態へとひきつけている。

㋮ 敷衍型

(1)は、ことの核心に遠い位置で、(2)は、近い位置で、敷衍して書き出している。しかし、(1)の方が、拡散していないことは、興味深い。

二 書き出しと第一段落

つぎには、書き出しの一文に始まる第一段落に注目する。その中

で、書き出しの一文は、どのような役目を担うことができているか。

① 第二文のうけつぎ語

〈表2〉の中につぎのように略記した。なお、( ) 内の数字は、頻度数である。

投げ出し→投 (20)　助詞→助 (3)　副詞→副 (1)

接続詞→接 (7)　指示詞→指 (9)

② 第二文のうけつぎの類型

言いかえ (5)　例示・詳述 (12)　補足 (3)　結果 (7)

理由 (4)　反証 (3)　自答 (1)　転換 (5)

③ 書き出しと第一段落の中心

(イ) 書き出しの一文の類型と第一段落の文数(〈表2〉の数字)が、それを示す。

(ロ) 題括、尾括、中括、一文一段の別

〈表2〉の( )印は、一段一文と第二段落との関係、・印は、一文章一段落の例である。(〈表2〉は次頁参照)

では、第二文のうけつぎの類型例は、どのような実態を見せているのか。

○ 第二文のうけつぎの類型例 (抄)

㋑(1) 少年は、放心した状態で大自然の中から生まれた人間、つまり自分自身を悟った。少年は、青春の中で誰もが感じる甘い夢の世界にひたっていた。(言いかえ○投　一—⑬=一年次十三番目の課題の意。以下同。)

(2) 「人生を生きる以上人生に深入りしない者は災いである。」——私は、この一文を読んだ時、はっと目が覚めた様な気持ちがした。(結果　△指　二—③)

(3) 夜中に台所に行ってみると、明日の味噌汁の具にでもなるのだろうシジミが、口をあけ、精一杯生きている。その姿を、鬼ババの笑いを浮かべた私がみている。(転換　□指　三—⑥)

㋺(1) この詩のおもしろさは、カメラを私の目にたとえているところだと思う。全体に体言止めが多く、歯切れがいいから、読んでいてもすらすら読める。(転換　○投　一—⑦)

(2) 酒呑童子の首塚の説話は、何となく神秘な気持ちを抱かせる。私は、こういう歴史的なものに首をつっ込むのが大好きである。(結果　△指　二—⑦)

(3) われわれは、最近本当に想像力を失なってきている。その原因は、一つはやはり社会のあり方にあると思う。(理由　□指　三—⑤)

㋩(1) 私は、「逆さに地図をながめてごらん」を読んで、さっそく地図を逆さにして見た。最初、とても奇妙な感じで、もとにもどしてみたい衝動にかられたが、しだいに真新しい物、新鮮な物を発見したような気がした。(結果　○投　一—②)

(2) そういえば、私は今まで、表現位置というものを、重要視したうえで文章を書いたことは、あまりなかったと思う。表現位置を考えただけで、比喩や修辞なしで生きた文章がかけるなんて思いもよらなかった。(言いかえ　△投　二—⑥)

(3) 去年の秋だったろうか、ポートピアも終わった後の、人気のないポートアイランドを訪れた。広大な埋め立て地には、大きなビルや工場が建てられ、整然としていた。(補足　□投　三—⑦)

〈表2〉（）は、一段一文と第二段落との関係、・は一文章一段落の例

	言いかえ	例示詳述	補足	結果	理由	証反	答自	換転
㋑引用	⑤投	①接 △2副		⑤投 △7指				[5]指
㋺実感		△5・投		△4指	⑤投 [7]投 [5]指			②投 [12]・投 △10投
㋩体験	⑧投 [4]投 △2投	②指	[7]投	②投 [6]接 △6助		③接		[12]・投
㋥自問	△12投						③指	
㋭解答		①指 [10]投						
㋬事実		②投	△12・指 △7接		[4]投	△5接		
㋣実態		△3助 ②投 △5助				△5投		
㋠敷衍		△6接 △3指		⑥指				

㈢(1) 青春――。それは、精一杯生きることだと思う。(自答 ○指 一―⑱)

(2) 人間は、なぜ生きているのだろう。何のために生きているのだろう。(言いかえ △投 二―⑱)

㋭(1) わたしのメモ法は、特にきまりなどはないけれど、だいたい次の通りです。たとえば、読書感想文などを書くとします。
(例示・詳述　○接　一―④)
(2) 読書をした後の気分によって、書き方もずい分違うが、私の感想文のタイプは第二と第三をまぜ合わせた感じのものだと思う。出だしに、心に強く残ったことを書き、後半で、自分の意見を述べるという形をだいたいとっている。(例示・詳述　□投　三―①)

㋮(1) この間の新聞に「ＩＣＢＭサイロ爆発」の記事がでていた。原発事故があいついでいる中で放射能もれがなくて、幸いだった。(例示・詳述　○投　一―⑫)
(2) 現代、姿を見ることができなくなった木馬の歴史をたどってみると、その昔、木馬は神聖な神へのいけにえと考えられていた。しかし、トロイア攻略の時、その神秘な栄光は失われた。
(反証　△接　二―⑮)
(3) 物事を理解する上において、ただまる暗記するほど無意味なものはない。暗記したものは、何度も繰り返し反復しなければ、いずれは忘れてしまう。(理由　□投　三―②)

㋯(1) 今日、写真はマスコミなどを通して、広く私達の生活にとけ込んできている。町中を歩いていても、至る所に写真がある。
(例示・詳述　○投　一―③)
(2) 近ごろ世の中で「おかげ」という言葉を本当に理解できている人は、大変少ないように思える。私が、ここにこうして元気で何不自由なく暮らせているのも親のおかげである。(反証　△投　二―②)

㋰(1) 人間の生涯は、長いようで、短いものである。その短い期間を、どのように生きるかによって、その人間の値うちが決まると思う。(結果　○指　一―⑤)
(2) 日本語とは、なんと素晴らしい言語であろう。たとえば代名詞においても、その一語が表現力を持っている。(例示・詳述　△接　二―⑧)

右のようである。
たとえば、中で、㋺ 実感 の例をみよう。(1)の唐突な「転換」、(2)の自然なうけつぎ、そして、(3)の迫力ある追求心と、年次を追って、そこには、確かな個体の「史」が認められる。
つぎに、そう書き出された第一段落の中心は、どのような位置に表れているか。(次頁〈表3〉参照)
ここでは、年次による絶対数の不均衡をも考慮に入れた上で、なお、二年次の頭括、年次を通じての尾括が目立つ。こうである。
○ 第一段落の中心のあり方の類型例(抄)
(1) この詩のおもしろさは、カメラを私の目にたとえているところだと思う。全体に体言止めが多く、歯切れいいから、読んでいてもすらすら読める。(㋺ (転) 頭括　一―⑦)
(2) 日本語とは、なんと素晴らしい言語であろう。たとえば代名詞においても、その一語が表現力を持っている。英語では「おはようございます」や「こんにちは」、「ご気元いかが」などあいさつをする時には、必ず「ユー」という語が入っている。これはどんな人に対してもそうであり、いわば形式的に入れるだけで、別

〈表3〉○（一年）、△（二年）、□（三年）内の略記は、第二文のうけつぎの類型（表3参照）

	㋑引用	㋺実感	㋩体験	㋥自問	㋭解答	㋬事実	㋣実態	㋠敷衍
頭括	△例	転△結△転	△言			理	例	△例△例
中括	△結	理 理	結	自△言		△補		
尼括	結 言 転	△例 理 転	結 例 反 言 転△結 言 補		例	例△補△反	△反△例△例	結
一文	(例)				(例)			

に特別な意味はない。しかし、日本語の代名詞の場合呼びかけに、「おまえ」や「あなた」を入れると、意味が特別になってくる。また、一人称において「てまえ」は謙譲語的な役割をする、「わたくし」といえば丁寧になる。(チ)△例 頭括 二—⑧

(3) 物事を理解する上において、ただまる暗記するほど無意味なものはない。暗記したものは、何度も繰り返し反復しなければ、いずれは忘れてしまう。英語の単語や数学公式において、それはある程度し方がないかもしれない。しかし、論語や故事成語などにおいてそれは違ってくるのではないだろうか。(ハ)理 頭括 三—②

(4) 青春——。それは精一杯生きることだと思う。私は、今はっきりそれがいえる。(ニ)自 中括 一—⑱

(5) 「人生を生きる以上人生に深入りしない者は災いである。」——私は、この一文を読んだ時、はっと目が覚めた様な気持ちがした。なぜなら、この一文は、私自身にも当てはまるからである。作者は、そして作者の子供たちは、妻を母を亡くしたことによって、当然今までより、悲しく苦しい立場に立たされるだろう。これからの人生においても、きっと苦労するだろう。しかし、妻、母という家庭の一本柱を亡くしたことによって彼らはそれを埋めるためにみんな戦わなければならない。そしてその戦いは、今までよ

りも彼らをずっと強くするだろうと私は思うのだ。(イ) 結 中括 二―③)

(6) 今まで私は、二、三度正式な講演を聞いたことがある。しかし、聞き終わった後に感動したり、納得したものは一つもなかった。なぜかという理由が近ごろわかってきた。それは、あらかじめ講演内容に対応する予備知識がないからである。だから、話している内容が理解できないし、興味もてないのである。自分自身の常識範囲の狭さを、つくづく情けなく思う。(ハ 結 中括 三―⑨)

(7) この間の夏休みに、家族で海に旅行しようという案がでたが、私がまず思ったことは、「この辺でどこに泳げる海があるだろう。」ということだった。近ごろは泳げる水のきれいな海は、ほとんどなくなってきているのだ。新聞でもしばしば「〇〇沿岸で赤潮発生」という記事をみる。当然漁民の人々は大きな災害をこうむっていることだろう。若い人たちが、収入にあわない漁業を捨てて、都会に出かけていくのもやむおえないといえないこともない。しかし、あとに残った人達はどうなるのだろう?さびれて行く漁村はどうなるのだろう。ここに過疎・過密問題も起こる。(ハ 言 尾括 一―⑪)

(8) 近年、伝統的な職業が、次々姿を消していった。炭焼きもその一つだと思う。すべてのものが合理化、機械かされている。ついこの間もスペースシャトルが打ち上げされた。すべてが進歩しているようである。(ト 例 尾括 二―⑤)

(9) 中学生の頃、啄木の詩が好きでよく読んだものだった。「一握の砂」が好きだった。彼の詩は、彼の悲しみ、絶望感が痛い程伝わってくる。そして、私も彼と同じような孤独感を自分の心にみいだすのである。(ハ 言 尾括 三―④)

中で、とりわけて、(7)・(8)・(9)の、一年次から三年次への「尾括」の例に注目しよう。

(7)では、書き出しにおいて、中心が見さだめられていなかった。ために、「尾括」が、遅きにすぎた。指導のありどころを示している。それに対して、(8)・(9)では、短い「ひといき」の抑揚を見せている。両者に、確かな「史」を認めることができる。成長の跡がある。

以上、第一段落を対象にして、そこにおける書き出しの一文と第二文との関係、および書き出しの一文と中心文との関係のあり方を見た。Sさんの場合に認められた自然の「史」に教えられて、わたしは、たとえば右の二点から、「抑揚」への論理の道を求めていきたい。

三　書き出しと文章の構造

さらには、四〇〇字の文章全体の「抑揚」にとって、「書き出し」は、どうかかわっているか。つぎの二点から、整理してみたい。

① 「続き」の四類型

A　解釈　分析　現実　詳述　補足

B　感想　意見　反証　主張

C　懸念

D　疑問　反省

② 「終わり」の四類型

A　解釈　分析　現実

B　感想　意見　意志　反証　主張　決意

C　推量　願望　期待　展望　懸念

D　回顧　反省　悔恨

その結果は、つぎの〈表4〉のようである。（次頁〈表4〉参照）

では、書き出しと文章の構造とのあり方は、どのような実態を見せているであろうか。

○　書き出しと文章の構造のあり方の類型例（抄）

なお、以下の例では、順に、(イ)書き出しの一文、(ロ)第二文、(ハ)第一段落の中心文、(ニ)「続き」、(ホ)「終わり」を示した。

(1)(イ)　私の家の近くに、一匹のどら猫がいる。

(ロ)・(ハ)　それが、この間赤ちゃんを四匹産んで、合計五匹の大家族となった。

(ニ)　やはり、どこでも親になると、少し感じが違ってくる。

(ホ)　今の世の中では、人間よりも、動物たちの母親の姿の方が、美しいのではないかと思う。(ハ)　A—A　尾　一—⑥

(2)(イ)・(ハ)　「レインコートを失くす」や「赤い繭（ママ）から、私は、現代社会での人間の在り方について、考えるところがあった。

(ロ)　前者は、日常性にただ埋没していたのが、その日常性のちょっとした破壊から、日頃埋もれていた重要なものに気づくというのがテーマだった。

(ニ)　私たち特に日本国民は、保守的で常に、連続の破壊を嫌う。

(ホ)　しかし、私たちの人としての在り方は、埋もれたままや、あきらめを持つよりも冒険をする必要がある。(チ)　A—B　頭　二—⑬

(3)(イ)　われわれは、最近本当に想像力を失なってきている。

(ロ)　その原因は、一つはやはり社会のあり方にあると思う。

(ハ)　想像力は度々素適（ママ）なものを生みだすものだ。

(ニ)　また、想像力は自己を抑制する力にもなってくれていることを改めて感じる。

(ホ)　近頃、盛んに軍備増強や防衛費増強などがあげられているが、これとて自国防衛などともっともらしい片書（ママ）きをかかげているが、想像力をもって考えてみると、人が人を殺し合う醜い社会へと向かう準備ではないだろうか。(ロ)　A—C　尾　三—⑤

(4)(イ)　「人生を生きる以上人生に深入りしない者は災いである。」

(ロ)・(ハ)・(ニ)　——私は、この一文を読んだ時、はっと目が覚めた様な気持ちがした。

(ホ)　私自身、父がいないということを、やはり今まで不幸なことだと思っていたが、もしかしたら、これは平々凡々とした人々より人生の深み、重み、尊さをよりよく知ること、歩むことができるのではないかと感じ始めた。(イ)　B—A　中　二—⑨

(5)(イ)・(ハ)　今日、写真はマスコミなどを通して、広く私達の生活にとけ込んできている。

(ロ)　町中を歩いていても、至る所に写真がある。

<表4>

	A-A	A-B	A-C	A-D	B-A	B-B	B-C	B-D	C-B	D-A	D-B	D-C	D-D
㋑ 引用		㊀ △頭	㊁ ㊁		△中	尾							
㋺ 実感	△尾 △頭		尾	中			頭	△頭	尾				㊥
㋩ 体験	㊁ ㊁	㊁ ㊁ 尾	中					△尾 尾				㊁	△頭
㋥ 自問	㊥				△中								
㋭ 解答		㊀											尾
㋬ 事実	頭	△尾	㊁ △尾								△中		
㋣ 実態		△尾 △尾				頭				△尾			
㋠ 敷衍		△頭	△頭			㊁							

(ニ) だが、本来写真を本当に理解することは、写真館などに飾ってあるものを鑑賞するほかは、記号として写真をみることである。

(ホ) 写真をとる側の人も、もう少し考える必要があるのではないか。(ト B－B (頭) 一－③)

(6) (イ) 中学生の頃、啄木の詩が好きでよく読んだものだった。

(ロ) 「一握の砂」が好きだった。

(ハ)・(ニ) そして、私も彼と同じような孤独感を自分の心にみいだすのである。

(ホ) しかし、私にも今は "V NARÓD!" と叫ぶだけの勇気はない。(ハ B－D 尾 三－④)

(7) (イ) おそらく、科学の進歩は、この先私の人生を大きくかえるだろうと思う。

(ロ) 先頃、知能指数の高いいわゆる天才人間を作る実験として、ノーベル賞受賞の男性とある女性との体外受精に成功したとかいうような記事を新聞で見た。

(ハ) 科学は今、侵してはいけない分野まで手を伸ばしてきている。

(ニ) こう考えると、やはり科学の進歩に危機感を抱く。

(ホ) だからそれを組織化し、総合化し、正しい利用をうながす力がぜひとも必要である。(ロ C－B 尾 三－⑧)

(8) (イ) 歴史は、たえず変化している。

(ロ) そして、それは確かに進歩し発展している。

(ハ) しかし、これによるマイナス面も少なくはない。

(ニ) 歴史という大きな流れの中に、豆粒ほどの人類がうごめいている中で、我々はただその流れにながされて行くだけでいいのだろうか。

(ホ) 我々は、後ろをふり返るなというけれど、ふり返ってみて、犯した誤ちは改め、持ち続けるべき良い伝統は守り続け、そこから、本当の第一歩をふみ出していかなければならない。

(ハ D－B 中 二－⑯)

(9) (イ) 私は、「逆さに地図をながめてごらん」を読んで、さっそく地図を逆さにして見た。

(ロ)・(ハ) 最初、とても奇妙な感じで、もとにもどしてみたい衝動にかられたが、しだいに真新しい物、新鮮な物を発見したような気がした。

(ニ) ただ、型にはまって、何でも常識的にばかりみていることは、何てつまらないことなんだろうと思った。

(ホ) 客観的にしか見ることのできなかった、世界地図に、今は何だか、親しみまで感じている。(ハ D－C (尾) 一－②)

(10) (イ)・(ハ) 読書をした後の気分によって、書き方もずい分違うが、私の感想文のタイプは第二と第三をまぜ合わせた感じのものだと思う。(ロ)出だしに、心に強く残ったことを書き、後半で、自分の意見を述べるという形をだいたいとっている。

(ニ) しかし、私の場合、しばしば個人の意見の発展が過ぎて、主題から掛け離れた方向に走ってしまう。

(ホ) 思うに、感想文を書く場合、まず読書をする段階において、自分自身を白紙の状態にしておかなければいけないと思う。

(ホ) D—D 尼 三—①

このように、四〇〇字の文章の構造を、その「書き出し」、「終わり」の三つの「抑揚」のうねりにおいてとらえる。そこには、「続き」一編一編に、Sさんの個性が、輝いている。これを、どう尊重し、生かすか。

さらに、たとえば、(1)・(2)・(3)の例に、Sさんの三年次にわたる「動態」をもとらえることができる。年次の特性が、そこにはある。

わたしたちは、それを、「終わり」の、(1)現実(指摘)、(2)主張、(3)懸念に、ついには見てとることができる。しかし、逆算してみれば、そこに至る必然性が、それぞれの「続き」に具体的に指向されていたことが、わかる。と同時に、そのことは、「書き出し」の一文に集約された時点に、すでに内在していたにちがいない。「書き出し」に注目する意味がある。

四 個体史一面

さて、それでは、Sさんの具体的な三編の文章(四〇〇字)を、三年次にわたって、比較してみよう。いずれも、同主題の例である。

一 (イ)この間の夏休みに、家族で海に旅行しようという案がでたが、私がまず思ったことは、「この辺でどこに泳げる海があるだろう。」ということだった。(ロ)近ごろは泳げる水のきれいな海は、ほとんどなくなってきているのだ。新聞でもしばしば「〇〇沿岸で赤潮発生」という記事をみる。当然漁民の人々は大きな災害をこうむっていることだろう。若い人たちが、収入にあわない漁業を捨てて、都会に出かけていくのもやむおえないといえないこともない。しかし、あとに残った人たちはどうなるのだろう?さびれて行く漁村はどうなるのだろう。(ハ)(ニ)ここに過疎過密問題も起こる。

今、すべての歯車が狂ってきているのだ。人間が人間のために行なっている文明開化が自然を破壊し、ゆく末は、私たち人類をも滅ぼす結果になるのだ。(ホ)私たちは、今、するべきことは何かをもう一度考え直す必要があるのではないか。(一—⑪ 「水上勉『海の孤独』を読んで」)

二 (イ)近年、伝統的な職業が、次々姿を消していった。(ロ)炭焼きもその一つだと思う。すべてのものが合理化、機械かされている。ついこの間もスペースシャトルがうち上げされた。(ハ)すべてが進歩しているようである。

しかし、私たちは大切なものを忘れてはいないだろうか。(ニ)それは仕事に対する生きがい愛情・誇りである。「紀州備長炭は日本一やのォ。」磯平老人のこの言葉には、炭焼きへのきってもきれない愛着の心がこめられている。現代にどれだけこのように業を愛して仕事している人がいよう。どれだけの人が生きがいを感じて働いているだろう。「省エネ時代」といわれている今の世の中で炭などはまだまだ役立つのではないだろうか。

(ホ)私たちは、ただ便利だからといって、コンピューターや機械に頼るのでなく、人間の腕で行う伝統職にも目を向けるべきではないか。(二—⑤ 「伝統職」)

三 (イ)去年の秋だったろうか、ポートピアも終わった後の、人気のないポートアイランドを訪れた。(ロ)広大な埋め立て地には、大きなビルや工場が建てられ、整然としていた。これだけの人工島を作り

だす人間、近代文明の発達に対する驚異の念と、何か素直にそれを喜べない気持ちが入りまじっていた。多くの船が入港している所に歩いて行った時、何となくいやな臭いがしたのを思いだす。あれは海の臭いではなかった。赤潮は見たことはないが、私でさえもこの海の変化に気がついて来ている。(二) ましてこのことを大人たちが気付いていないわけがない。

しかし、その対策は何らされていないではないか。人はその先のことまで考えようとはしない。美しい美しい赤い海の先に何が待っているかを。それをしっかり見つめれば、行く先は見えているではないか。現在のことだけを考えていては、必ず後で破局をむかえる。(注2) それからでは遅すぎる、遅すぎるのだ。(三—⑦ 「美しい美しい赤い海」)

各年次にわたるこの三編は、いずれもが、第一段落「尾括」、「続き」—「終わり」は、「A—B」である。同じ主題「文明論」で、Sさんの残した個としてのこの軌跡は、まず第一に、個体史の一面として、注目される。

また、右の形式に即して「主張」(「終わり」)のあり方に、形式の類似性を越えた違いが、見られる。一、「考え直す」、二、「目を向ける」、三、(いらだった警告) ——という変化である。

さらに、書き出しそのものの違いがある。とりわけ、第一段落の構造に、一、冗長、二、たたみかける短文、三、満を持したおさえ——という変化である。指導の入り口がある。

おわりに

わたしは、さきに、Sさんが一年生として入学した当初の四月、彼女を含む四つのクラス一八二人の「書き出す力」をみつめた。(注3) 出発時につけえていた表現力であった。

それからちょうど一年、学年の終わりに、Sさんと同様に「理解」から「表現」への努力を重ねてきたUさんは、一年をふり返って、「文章を書くこと」と題して、こう述懐した。

○ わたしは、この一年間いろいろな文章を書いてきた。それで思ったことは、高校になると抽象的な文章を多く要求されるということだ。わたしは、いわゆる「作文」は得意であった。しかし、「思ったことを率直に書く」ということに徹していただけで、内容を理路整然に組み立て書くことなどできていなかった。この技術に関しては、少しは進歩した、といいより理解しただけと言った方が正しいだろう。

ところで、抽象的な文章を書くには、物事をさまざまな方面から見つめ、それによってより正しい考えを整理しなければいけないと思う。わたしにおいては、具体例についての率直な印象ばかりを書くと、内容がかたよってくるのである。そして、物事をさまざまな方面から見つめるのに障害となるのは、青春のシンボルといわれている「自我」だと思う。自我によってひき起こされる偏見は、わたしの視野をよりいっそう狭くしているようだ。もっとも、その偏りが大人になる第一歩だともいえるかもしれないが…。

このようにして、わたしを含む人々がいろいろな種類の文章を書く。すばらしいもの、偏見に満ちたもの、支離滅裂なもの、それらはどんなものでも、その人の内面を表している。(支離滅裂なら、その人の錯乱した精神状態を表すというように) そして、あらゆる人々の文章の一般的な傾向をみれば、全体の文化というものがつかめる。また、記録を書くことによって、歴史の資料にもなる。人々の心を揺り動かすことだってできる。これは芸術というよりほかにないだろう。

高度な芸術的文章などは期待薄であるが、筋のとおった文章なら誰でも書けるようになると思う。それには、できるだけたくさん文章をかいて、正しい思考様式、文章を書くこつをつかんでいかなければいけない。たくさん試行錯誤をすることが大切なのだとわたしは思う。(一—⑲)

ここには、わたしたちが、「理解」と「表現」との「統合」を目指して、「教室」で何をなすべきかが、如実に述べられている。「率直」から「理路整然」へ——。「自我」と闘いながら、「文章」を、「芸術」・「文化」との必然の関係においてとらえ、「試行錯誤」を決意するこの真摯さに、わたしは、具体的に応えたい。

「書き出す力の個体史」は、このような決意のための、確かな足場を求めてのものである。

注1　藤原与一先生『私の国語教育学』（新光閣書店刊）一一八ページ他

2　使用教科書は、三省堂「新版現代国語」1〜3。各年次とも、計画に従って、単元教材を、任意に組み変えた。

3　拙稿「わたしの『現代国語』教室（一八）——書き出す力その一——」（「国語教育研究」第二十七号）で詳述した。

〔後記〕　本稿は、一九八二・八・一一、広島大学教育学部国語教育学会で口頭発表したものに、手を加えたもので、のち、拙著「高校文章表現指導の探究」（溪水社一九八三・八・一〇刊）II—八に収めた。

（一九八二・八・一四初稿）
（一九八三・一・二二改稿）

（大阪府立豊中高等学校教諭）